

# 津和野キリシタン殉教史

## ——いわゆる「氷責め」の記述について——

三輪 地塩

Miwa, Chishio

### 目次

1. はじめに——研究の目的
2. 「氷責め」を記録した文書
  - 2.1. 『高木覚書』
  - 2.2. 『復活史』
  - 2.3. 『守山覚書』
  - 2.4. 『旅の話』
3. 「氷責め」記録の比較
  - 3.1. 「氷責め」記事の分類
4. おわりに

### 1. はじめに——研究の目的

浦上四番崩れ<sup>(1)</sup>によって捕縛された約 3400 名のキリシタンは、西日本各藩に流配されそのうちの少なくない者たちが殉教を遂げたとされる。津和野藩には 153 名が流配され、その記録は多くの研究者、とりわけカトリック宣教師たちによって残されている。特に重要な史料は、Missions Étrangères de Paris (パリ外国宣教会、以下 MEP) のフランシスク・マルナス (Francisque Marnas、1859–1932) の『日本キリシタン復活史<sup>(2)</sup>』(以下『復活史』) 並びに、浦川和一郎の『旅の話』であり、それらの種本となったのが流配キリシタン当事者たちによる手記である高木仙右衛門の『覚書』(以下、『高木覚書』) と守山甚三郎の『覚書』(以下、『守山覚書』) である。

書』)である。【参考資料 1】に記した出版年から明らかなように、マルナスの記録が浦上四番崩れの最初期の記録となる。浦川はこれを骨格に独自調査によって肉づけした内容を付加しつつ『旅の話』を著した。それゆえに多くの違いも見られるがこの二つは同系統の記録によって書かれている。ローマ・カトリック教会で江戸末期から明治初期における日本の宣教を MEP が行なうことになっていた。そのため、浦上四番崩れを含むこの時代のキリシタン側の殉教記録は MEP の立場から書かれた文書である。この出来事を詳細に記録した江戸幕府あるいは明治政府の記録が殆ど残されていないため、現在残されている浦上四番崩れに関する現在の歴史叙述は、MEP の宣教師たちの記述に負っていると言てよい。

本研究の目的は、浦上四番崩れという歴史的事件の事実関係を突き止めるものではなく、歴史として何を語ったかの究明である。つまり当時の宣教師・信者たちがキリシタンの歴史として書き残した記録の叙述に見られる記述の分析である。彼らは何を見、何を残す事を目的として記述したのであるか。また誰に対し「これが日本のキリシタンの殉教の姿である」と語ろうとしたのか。以上の点を、津和野に流配されたキリシタンの記録を取り上げて分析する。

## 2. 「氷責め」を叙述した記録文書

津和野藩に流刑されたキリシタンの記録文書には幾つもの逸話が残されており、他藩のそれと比べても独特なものが多い。その主な出来事は、「氷責めの拷問<sup>(4)</sup>」「三尺牢での聖母マリアの出現<sup>(5)</sup>」「守山祐次郎の十字架<sup>(6)</sup>」などであり、これらは津和野キリシタンに起きた殉教物語の象徴的場面として語り継がれている。中でも『復活史』、『旅の話』で共に語られ、『高木覚書』、『守山覚書』にもその一部始終が記録されているのが「氷責め」の出来事である。本章ではこの「氷責め」についての各書の記録を比較分析し、その叙述を検証する。以下、「氷責め」について記述された文書の説明並びにそれらが書かれた背景について記す。

## 2.1. 『高木覚書』

1877-79年頃に書かれたものと推定される『高木覚書』<sup>(7)</sup>は、津和野キリシタンの記録として最も早い段階で書かれたものであるが、それでも1872年の解放から既に5-7年経っており、記憶が完全に鮮明だった時のものとは言い難い。『高木覚書』は彼自身の執筆によるものではなく「時々プティジャン司教が長崎に来て、同司教の前で仙右衛門が言上したことを森松次郎が執筆したもの」<sup>(8)</sup>であるという。本人の筆によるものではないとは言えこの覚書が存在する意味は大きく、迫害を受けた当事者の残した記録という意味でも価値が高い。又、この内容を基にしてその後の津和野キリシタン史が書かれているため、この覚書が津和野キリシタン史の出発点であると言える。

## 2.2. 『復活史』

高木の次に津和野キリシタン史について記した文書は『復活史』である。著者E.マルナスは1889年(9ヵ月間)、1893年(数年)、1908年の3回来日し、特に2度目の長期滞在時の間に日本のキリスト教布教資料を収集し、帰仏後1896年に『復活史』を出版した。マルナスは日本の宣教に長く関わっていたわけではなく<sup>(9)</sup>日本のキリシタン殉教に興味を持ち、フランス人としてフランスで日本のキリシタンの事を記録した。マルナスは『復活史』の緒言で執筆意図を次のように語る。

この私の著作が、多くの人々の関心をあつめているこの伝道をもっと人々に知ってもらう事ができ、祈りや喜捨を大いに必要とする時にこの伝道に対する共感を生ぜしめることができたならば、また、特に未知の魂に伝道者になりたいという希望を抱かしめ、福音をまだ知らない国民にそれを与えるためならどんな物でも犠牲にしようという望みを抱かす事ができるなら、私は極めて幸福であり、私の払った苦勞の千倍以上もの報いを得ることになったと思うであろう。<sup>(10)</sup>

マルナスの執筆目的は、日本の殉教物語を知ることによって新たに伝道者が起こされることであり、更にその伝道者になる人が「福音をまだ知らない国民にそれを与えるためならどんな物でも犠牲にしようという望みを抱かす事ができるなら」ば、「極めて幸福である」と語っておりここに彼の意図が看取される。言い換えるならば、この記録を残すのは「日本の信徒のため」であるより「伝道の前進」、とりわけ明言されていないが、母国において MEP の伝道者を志す者が生まれることに主眼があったということであろう。

### 2.3. 『守山覚書』

次の『守山覚書』であるが、高木慶子はこれについて「成立年代は1917-1918年とされており、記録された時の甚三郎の年齢は72-74歳となる。本書は津和野帰郷後、時間が経ちすぎているために、記憶がやや不鮮明になっていたり、忘失したりした部分もあると思われるが、『仙右衛門覚書』<sup>(11)</sup>同様に根本史料として重要な位置を占める」と述べており<sup>(12)</sup>、この文書を高く評価している。しかし『守山覚書』は『高木覚書』の39年後の執筆であり<sup>(13)</sup>、浦上への帰還から計算すると実に47年の歳月を経たからの記録となる。どれほど記憶力に優れた人であっても半世紀前に自身に起こった出来事を正確に記憶する事など出来ないだろう。それゆえこの手記には相当な記憶違いや脚色が施されているに違いない。浦上四番崩れで流配された信徒たちは流配事件を「旅」と呼び「旅の話」として後世に語り伝えている。それは単に経験者が語るだけでなく、経験していない者が自分の経験のように語り後世に伝えるという特徴を持っている<sup>(14)</sup>。この手記は、甚三郎自身の経験談に加えてこれまで語り伝えられてきた——乃至、彼自身が人に語り人から語られてきた——内容が含まれているのかもしれない。その意味においては当事者の手記ではあるが正確な歴史記録ではなくむしろ語られた叙述であり、語り伝えたいことの叙述、という事になろう。

#### 2.4.『旅の話』

『旅の話』は、『守山覚書』の10年後に浦川和三郎によって書かれた。『切支丹の復活』(後篇)の第三章が『旅の話』であるが、しばしば単体として扱われる事が多い。浦川和三郎は1876年長崎生まれ、司祭叙階が1906年であり前述の執筆者の中で最も若い。浦川は長崎公教神学校教授、同神学校長を経て1941年に仙台教区の司教となる。『旅の話』はその直前の1938年に出版された。上述した文書よりも成立年代が遅いため二次資料的であるが、浦上四番崩れ流配事件による迫害の体験者たちを訪ねて、親しく聞き集めた回顧談を織り交ぜて書かれているため、部分的に一次資料的な要素も残されている<sup>(15)</sup>。底本はマルナスの『復活史』であり、『旅の話』の大部分がこれと類似している。

### 3.「氷責め」記録の比較

「氷責め」の話には、当時の迫害・拷問の状況が表されている。【参考資料1】は「氷責め」に関する記述の重要部分を抜粋したものの対観表であり、左から成立年を時系列に並べている。一瞥してその分量の違いが分かる。文字数では、『旅の話』『復活史』『守山覚書』『高木覚書』の順である。マルナスの著作はフランス語であるため、翻訳された日本語の文字数によって単純比較する事は出来ないが、この逸話への関心の高さを知る上での一定の指標となるだろう。

時代を経ていくに従って内容が次第に増えている事が分かる。これは多くの資料が後から見つかり、独自の資料や聞き取り調査などの成果が反映されているため、新たな文言が加わったからであろう。内容の詳細を見ていくと、単に情報が増えた事が文書を大部にしているだけではない事が判る。多くの情報を受け取った執筆者がそこに解釈を含め自らの中で得た情報を取捨選択しており、そこに残された記述は明らかに執筆者が残したい情報なのである。

### 3.1. 「氷責め」記事の叙述分析

氷責めの記事内容を分類して纏めると以下の図1のように分けられるが、これを見ても明らかなように、『高木覚書』の内容を参考にして『復活史』が書かれたという推測がつく。マルナスの日本で収集した資料の中には『高木覚書』があったと思われるが、『守山覚書』の成立が、『復活史』出版の12年後である事から、『守山覚書』の内容は反映される事が無かった。

- A. 高木仙右衛門は熱があり体調不良であった。出頭を勧弁してほしいと願ひ出る。
- B. 役人は仙右衛門の訴えを退け、無理に出頭させ改心を迫る。
- C. 仙右衛門は、改心しない事を固持し、その会話が交わされる。
- D. 衣服を脱がされ、池に突き落とされる。
- E-1. 高木仙右衛門のみが氷の池に入れられる。池は深くない。
- E-2. 高木仙右衛門と守山甚三郎が同時に氷の池に入れられる。池は深かった。
- F. 役人に「上がれ」と言われたが、「宝の山（天国？）が間近なので（殉教を遂げるという栄光が近づいているので）上がらない。
- G. 役人に池から引きずり出される。
- H-1. その後、甚三郎が氷の池に入れられた。
- H-2. その後、甚三郎以外の者たちが氷の池に入れられた。

[図1]

	『高木覚書』	『復活史』	『守山覚書』	『宣教50年』	『旅の話』
A	○	○	—	—	○
B	○	○	—	—	○
C	○	○	—	—	○
D	○	○	○	△	○
E-1	○	○	○	△	○
E-2	—	—	○	—	○
F	—	—	○	—	○
G	○	○	○	—	○
H-1	○	○	—	—	—
H-2	○	○	—	—	—

『守山覚書』にはABCが抜けているが、仙右衛門の体調不良に関する内容であるため守山個人の記録に出て来なくても不自然ではない。しかし高木と守山には共通経験であったはずのEとHが食い違っている。『高木覚書』ではE-1、H-1であるが、『守山覚書』ではE-2なのである。つまり、高木の記事では、最初自分だけが池に入れられて引き上げられたのち甚三郎が池に入れられたと読む事ができるのだが、守山の記事では、高木と2人同時に池に入ったと記録されている。また、池の深さについても、高木はその事に明確に記していないが、「役人が腹を立てて彼の上四方から水を何度も掛けた」という事から考えて、頭だけが水面から出ている状態ではなく腰または胸部より上あたりが出ていたようにも読み取れるため、この池が深くないという印象を受ける。それに対して守山は、「深くて背は届かず、真ん中に浅瀬あり、われの顎まで浸かり」とあるように、彼によれば池は深かったのであり、それはこの池がより危険な場所であった事を強調する描写となっている。

更に、池の中から引き上げられる時の描写についても記述の違いが見られる。高木の場合は、単に役人に引き上げられたとして記されるが、守山の記録では、役人の「早く上がれ」の命令に対し「今宝の山ニ([ママ])あがりておるからには、この池の中より上がられん」と言っており、恐らくこれは「殉教という栄光の宝の山を登り切るところまで来ているのだから自分の意志としては出たくない」という意味だと思われるが、いずれにせよ守山はこの言葉を語らせているのである。しかも『守山覚書』ではこの言葉を語ったのが高木か守山かが示されていないのだが、『旅の話』では明確に高木の言葉にしている。これは高木仙右衛門のリーダー性が強調された叙述であり、守山よりも高木を中心に据えたストーリーに構成しようとする浦川和三郎の意図が看取される。

上述のように、一見するとどれも同じ事柄を描いているように見える氷責めの記事であるが、その細部に目を凝らしていくと随分と異なっている事が判る。これが同じ日、同じ時間、同じ場所で、同じ拷問を受けた当事者同士の記録の齟齬である事は興味深い。しかしながら、この時の

二人が如何なる状況で苦しんだかの事実関係が問題ではなく、何を事実として受け取ったかということ、換言すれば何を真実の出来事として描写し記録したかが重要である。この点についてマルナスの『復活史』は高木の記録に依拠しており、守山の証言は含まれていないように読み取れる。例えば、「…彼（高木仙右衛門）が立ち上がると、腰まで水があった」とあり、拷問の池をあまり深くないものとして描いている。又、高木仙右衛門への氷責めが終わった後、「この苦しみを受けたのは彼だけではなかった。彼のもう一人の仲間の甚三郎という男も、すぐ後に同じような目に遭ったが、彼と同じように棄教しなかった」とあるように、最初に高木、次に守山、という順番になっており二人同時にという描写ではない。『高木覚書』『守山覚書』の執筆が1879年と1918年であり、マルナスは『高木覚書』しか読むことが出来なかったとも言える。だがマルナスも浦上に帰還した者たちからの聞き取りは出来たはずであるが、それでも「高木が最初、守山が後」と記述しているのである。そう考えると守山の手記は、浦上帰還後に方々で語り、又聞かされた「旅の話」に触れる中で、自らの記憶をより自分の記憶として留めておきたい方向で記憶したのと言え。つまり彼は「高木と一緒に入っているものとして記憶したかった」のであり、それは即ち、氷の池は深く息をする事も困難な場所であり、仙右衛門という浦上キリシタンの指導者の人物と共に、池の中で語り合い励まし合いながら、殉教する事を厭わず拷問を受けた、という記憶として残したいという思いが記録文書に反映されたという事である。

『旅の話』は『守山覚書』の要素が取り入れられている。浦川の描いた「氷責め」の顛末は、仙右衛門と甚三郎の両人が同時に突き落とされ、池は深く、息をするのも困難で、体に感じる痛みの鋭さが強調されている。これらは『高木覚書』の要素よりも守山のそれを取り入れている事が判る。そして単に取り入れるだけでなく池での出来事に更に詳細な描写が付加されている。「寒さは骨髓にてっした」「身体が震えだしてやまない」「冷水によって体が）キリで刺されるように覚える」「顔色が蒼黒



くなってきた」などのように、『守山覚書』にも無かった身体的苦痛を伴う描写が増えているように感じられる。そのため他の3文書に比べて拷問の苦しみはより一層劇的に表現され、痛々しい印象が増し加えられた叙述になっている。しかし同時に、拷問を受ける人物たちの姿勢はむしろ喜んでこの責苦を受けているようですらある。

尤も、浦川はマルナス『復活史』を底本としていると明言しているものの、その他の文章に関しては浦上の帰還者たちからの回顧談を聞き取り調査する事によって補完したものであり、必ずしも守山甚三郎の手記だけで補ったわけではない。だが、帰還者たちが3人ほど集まるところで度々語り伝えられた「旅の話」が、それが事実であるか否かを問わず——あたかも生き物のように——成長し、ある一定の方向性をもった物語へと発展したと考える事が出来るのである。『守山覚書』も、ちょうどそのように成長し発展した物語となった時（執筆された1918年頃）に、彼の記憶が「体験談」として記録化されたのではなかろうか。

#### 4. おわりに

1896年に長崎県庁で発見された『マルチリヨの葉』なる古文書には、次のように記されている。「丸血留（殉教者）になるためには死ぬことが肝要である。第一に、人から迫害を受けるのを耐え忍ぶこと。…第二に殺される者、知恵分別のある者ならば、その成敗（拷問）を辞退せず、喜んで忍耐してそれを受け容れるならば、それは丸血留と言い得る。但し、拷問を嫌がって死んだものは丸血留ではない。辞退すべき心が無い事により丸血留となる<sup>(17)</sup>」。浦上一番崩れの時に長崎奉行所が没収したこの古文書は、当時の潜伏キリシタンたちに殉教の意義、心得、模範を伝えるものであった。当時のキリシタンたちがこれを直に読んだか否かは定かではないが、これが実際に長崎から没収されていることから、殉教の心得や模範といったあるべき苦しみを苦しむ信徒像が何らかの形で潜伏キリシタンたちの中に流布し、伝えられ、如何なる状況であっても“ばらいそ”を目指して拷問を受けるといふ屈強な信徒像に反映されていっ

たのだと考えられるのである。

既に述べてきたように、津和野におけるキリシタン殉教史の文書記録において、幾つもの変化が見られる。又その記録は簡素になるのではなく、より激しい場面として描かれる。守山然り浦川然り、彼らには記憶を歪曲するつもりも改竄するつもりもなかったかもしれないが、「拷問」「殉教」という事柄の本質が記憶を自ずとある方向性へと導いたという事は言えるであろう。つまり拷問が拷問である為には、それが楽なものであってはならず、より厳しく苦しいものとして受け取るべきである、という殉教観である。織豊の時代よりキリシタン信徒たちは、極めて悲惨な責苦を受け、それによってキリストの受難と共に生き、共に死んでゆく事により“ばらいそ”への栄光ある帰天が叶う。キリシタンたちにとって重要なのは、明治新政府の行った拷問の厳しさや辛辣さは徳川幕府のそれに引けを取らず、あの16世紀末から17世紀初頭にかけて起こった二十六聖人や二百五福者たちの受けた痛みと苦しみと同じであるという事実が記録されるべきである、ということにある。我々はこの「氷責め」の記録から、当時のキリシタンたちが大事にしていた殉教観や信仰的な意図を読み取ることが出来るのである。

## 注

- (1) 「浦上四番崩れ」とは、長崎浦上地区において江戸末期から明治時代初期にかけて起きた、総勢 3400 名を超える一村総流罪という前代未聞の捕縛事件のことを言う。この地にはかねてより多くの潜伏キリシタンがおり、四回にわたって捕縛事件（崩れ）が起こったが、中でも最大の崩れが 1867 年の「四番崩れ」であった。第一次移送（1868 年（明治元年）5 月）では、浦上キリシタンの中心人物たち 114 名が、長州藩 66 名、津和野藩 28 名、福山藩 20 名と、それぞれ流配された。その後、約 3300 名が検挙され、第二次移送（1869 年 12 月 4 日）が行われた。流配先は、名古屋、和歌山、金沢、松江、津和野、岡山、広島、福山、高知、萩など、名古屋以西の有力各藩が割り当てられた。本論で言及される津和野藩には、第一次移送の 28 名と第二次移送の 125 名、合計 153 名が流配された。
- (2) マルナス、F.『日本キリスト教復活史』（久野桂一郎訳）、みすず書房、1986 年 [Marnas, F., *La "Religion de Jésus" (Iaso ja-kyō) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX<sup>e</sup> siècle*, 2 tom., Paris: Delhomme et Briguet, [1896]]。
- (3) 浦川和三郎「旅の話」『切支丹の復活』後篇、日本カトリック刊行会、1928 年、第三章。
- (4) 高木仙右衛門、守山甚三郎ら数名が棄教を迫られ、厚い氷の張った極寒の池に沈められた。現在も「氷責めの池」として光琳寺跡の乙女峠マリア記念聖堂横に伝えられているその池の一部が残されている。
- (5) 和三郎は三尺牢と呼ばれる 90cm 四方の牢に入れられて庭に放置され極寒の中力尽きて最初の殉教者となった。二番目の殉教者は安太郎（29 歳）であった。彼も死の直前まで三尺牢に閉じ込められていたが、ある夜、目の前に聖母マリアが出現し、「優しい声で非常に善い勧告をしてくれて慰めてくれる（浦川和三郎『旅の話』）」と証言している。このマリア像と安太郎像は、その時の伝説を記念して乙女峠マリア記念聖堂横に建てられている。この逸話は高木仙右衛門『覚書』と『守山甚三郎の覚書』の両方に記されている。
- (6) 守山甚三郎の弟である守山祐次郎（14 歳）が十字架にかかって殉教したとされる場所。十字架が立った痕跡は残されていなかったが、案内看板には今でもこの場所を「守山祐次郎少年、十字架殉教（1871 年）の跡」

として記念し残している。

- (7) 高木慶子『高木仙右衛門の研究』、思文閣、2013年、32-33頁。
- (8) 同書、33頁。
- (9) 日本滞在中は大阪名誉司教総代理 (vicaire général honoraire) を務め、1919年にクレモン司教の補佐司教、1921年にクレルモン＝フェランの司教となった (マルナス、前掲書、著者略歴)。
- (10) 同書、xiii-xiv頁。
- (11) 本稿における『高木覚書』と同じ。
- (12) 高木、前掲書、35頁。
- (13) パチェコ・ディエゴは、この執筆年を1908年としているが (パチェコ・ディエゴ編『守山甚三郎の覚え書』二十六聖人記念館、1964年、5頁)、ここでは高木慶子の研究成果に依拠する (高木、前掲書、35頁)。
- (14) カトリック上福岡教会 Web サイトにはこの事について語られている。「…祖母も、そして浦上浜口町出身の祖父も「旅」には行っていません。しかし、まるで自分たちが体験したことのように、幾度も「旅の話」を私たちに聞かせてくれました。ただ祖母の話は、彼女自身が体験者から直接聞かされた島根県津和野での様子ばかりだったので、私は配流地が津和野だけでなく西日本を中心とした全国22か所に及ぶことも、流された全村民の総数が3,394人にも及ぶということも、自分自身で「旅」のことを調べ始めるまでは知りませんでした。祖母から聞いた「旅の話」は、津和野に流された高木仙右衛門や守山甚三郎の話が中心でした」(匿名男性、[http://www.kamifukuoka-catholic.jp/guide/newsletter/news\\_13\\_12\\_25.html](http://www.kamifukuoka-catholic.jp/guide/newsletter/news_13_12_25.html)、2014年9月5日)。筆者はこの証言者への聞き取り調査を2014年9月6日に行なったが、彼はカトリック上福岡教会員の井手均氏 (65歳) であった。旅の話を経験していない者が当事者的に語るという語りは特徴的であり、語り伝えられ流布していく旅の話が、その全体像を捉えた総論的なものではなく、流された地域の部分的な各論的な語りである事が判った。
- (15) 『世界ノンフィクション全集 39』筑摩書房、1963年、451頁。
- (16) 浦川はこれらの体験談を聞く経緯について次のように語る。「彼等は放免歸郷後にも、流罪の旅で満喫した悲惨事だけは流石に忘れ難く、雨の朝

にも風の夕にも兩三人相集まると、必ず「旅の話」をくりかへして昔を偲ぶのであつた。然し明治六年の歸郷から數へて昭和十三年までには早や六十五年、古老は大抵永眠につき、「旅の話」の聞かんと欲して聞く能はざるに至つた。幸ひ私が嘗て信仰の勇者達を歴訪するか、本原町の十字會に集つて戴くかして、その生々しい體驗話を書留、これを『切支丹の復活』の中に収め…」（浦川和三郎『浦上切支丹史』国書刊行会、1973年（1943年）、1頁）。

- (17) 尾原悟編『さりしたんの殉教と潜伏』（キリシタン文学叢書、キリシタン研究第43輯）教文館、2006年、101頁。
- (18) 1789-1800年。

（立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 みわ・ちしお）

【参考資料1】“氷責め”に関する記述（抜粋）の対観表

	『高木覚書』1879年	マルナス『日本キリスト教復活史』1896年	
池に入る	寒さは体中を針で刺すが如くござりました。その時おらしよを声一杯におめいて申しましたところが役人腹を立ててその上四方より水をくりかけられました。	彼が立ち上がると、腰まで水があった。直ぐに彼は手をあわせて祈り出した。これを見て、そこにいた人たちは彼に悪口を浴びせかけた。落ち着いて耐え忍んでいる態度が彼らには我慢できなかった。寒さは極めて厳しく、可愛そうな信仰告白者の身体は痙攣して震えた。彼の激しい震えのため、彼はやがてもう口がきけなくなった。しかし彼は合掌を続け、目を天に向けていた。役人は彼に座るよう命じた。彼は跪いた。水は彼の口にまで達していた。しかし手を合わせたまま上に上げ、まだ折っていた。だんだんと彼の体は感覚を失い、手は下がったが、彼の心だけは相変わらず神に向けられ、最後まで彼の苦しみを支えて下さる神の力を彼は期待していた。刑吏は見物人を喜ばせるために、彼の頭上に水を掛けた。この水は彼の目や耳の中にまで入り、彼はひどく苦しんだ。彼の顔は蒼白となり、彼の体は次第に衰え、もう少しで死にそうになった。彼自身にもそれが分かった。しかし、役人はこの拷問で彼の命を奪う事になるのを望まず、立ちあがって水から出るように命じた。	
池から上がる	このとき役人ども、「こふして置いても死ぬる、又あげても死ぬるによって早く上げよ」というで池から上げられて、又元の賣場所に握へられて「これでも勘弁はつかぬか」と申されました。	しかし、彼が身を動かそうとしても、どうにもならなかった。彼の全身は冷え切り、力尽き、動く事が出来なかった。しかしついに最後の力をふるって、立ち上がり、池から出た。随分長く思われた(約2時間)。	
守山の事	又甚三郎と云う人池に入れられました。その間私御吟味を受けました。	この苦しみを受けたのは彼だけではなかった。彼のもう一人の仲間の甚三郎という男も、すぐ後に同じような目に遭ったが、	
他の人の事	又その中甚三郎の父国太郎と云う人もその池に入れられました。その次に土井の友八と云う人が池に入れられました。それから松五郎と云う人は池入りの替わりに他の半屋にやられました時三日の間食わずにありました。	彼と同じように棄教しなかった。その後、中野の国太郎と平の又市がこの苦しみを受ける番になった。	

『守山覚書』1918年	浦川和三部『旅の話』1938年
<p>その時水は破れ、あちこちを泳いで回れども、<b>深く</b>て、背は届かず、真ん中に浅瀬あり、われの頭まで浸かり、その時天を眺め、手を合わせ、サンタマリアに訴訟の御取次をたのみ、イエズスの御供を願ひ、仙右衛門さんハ「天にまします」の祈りを申し上げなざる、わたくしハ身を献げる祈りを申します。その時役人が申すには、「仙右衛門、甚三郎、天主が目にかかるか。さあ、どうか」とあざげりました。その時つらに水をくり投げつけ、息の取られんように致しました。それよりだんだん体は冷え凍り、だんだん震えがきまして、歯は、がちがちになり、そこに仙右衛門殿申されるにハ、「甚三郎、覚悟はいかが、わたくしは目が見えぬ。世界がくるくる回る。どうぞわたくしに気を付けて下され。」もはや、息が切れんとする時にあたりて、役人が申す事に、「早く上げろ」と言いつけたり、</p>	<p>池はなかなか深い。頭まで没してしまふ。泳ぎ回って見ると、幸い真ん中に浅瀬があって、アゴまで来る。役人は白洲にズラリと居並び、さも気持ちよさそうに見物している。時々長柄の柄杓でザアザアと水をかける。二人は天を仰ぎ両手を合わせた。仙右衛門は「天ニ在ス」を、甚三郎は「身を献ぐるおらしよ」を称える。役人らは座敷から「仙右衛門、甚三郎、デウスが見えるか」とあざげる。二人は何とも答えない。もうこれが最期だと覚悟して一心に祈っている。彼らの落ち着きはらった態度が、役人らのシャクに触ったと見え、「頭にもっと水をかけい、水をかけい」と叫び、さんざん毒舌を浴びせる。時間ほどのくらいであったか、随分長かったように思われた。寒さは骨髓に透した。身体が震えだしてやまない。ことに仙右衛門は老体である。数日来熱を病み、疲れ果てていたので、苦しさがひとしお強く身にこたえる。両手をきつく組み合わせて天を仰ぎ、一心不乱に祈ってはいいるが、しかし<b>身体は次第に感覚を失った</b>。両手はだんだん下がって来た。心までが遠くなった。役人は相変わらず水をザアザアと浴びせる。それが<b>目に入り、耳に入り、キリで刺されるように覚える</b>。今はもう<b>顔色が蒼黒く</b>なってきた。甚三郎は気づかかって「仙右衛門さん」と声をかけてみた。早や舌の根が<b>こぼれている</b>。「甚三郎、もう世界がキリキリ回るよ。わしはこのまま行くが、お前は覚悟できたか」と言う。実際ここ数分間で生命は無いものと思われた。</p>
<p>その時警護の役人「早く上がれ」と申したれど、「今宝の山ニあがりておるからには、この池の中より上がられん。」と言うておる内に、三間ばかりの竹の先にかぎを付け、かぎの先に髪毛を巻きつけ、力に任せて引き寄せたり。それより水の中より引き上げ、</p>	<p>役人はそれを見て、「甚三郎、仙右衛門上がれッ」と大音をかけた。仙「甚三郎、宝の山に入っておるぞ。必ず上がるという心を持つな。上がらぬぞ。今日は二人手を引き合せて行くのだよ」と、<b>仙右衛門は廻らぬ舌を廻して甚三郎をはげました</b>。役人の声が掛かっても二人は上がらぬ。上がろうとしても実際上がる力もない。すると三間半ばかりもあろうかと思われる竹の先端にかぎをつけ、それで二人の頭髪をグルグルと巻いて引き上げた。</p>
<p>仙右衛門はもとノところに入る、甚三郎ハ町ノかんしんの物のおところの三尺半屋に入りて、嚴重に致せ」と言いつけたり。</p>	<p>役人「仙右衛門はそのままとの牢に帰れ。甚三郎は年こそ若けれ、他人の助けをする、三尺半にたたきこめ」と下知した。</p>